

---

# 勇者は魔王で人間で？

ハルジオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者は魔王で人間で？

### 【NZコード】

N9277Y

### 【作者名】

ハルジオン

### 【あらすじ】

一人の少年が学園に足を踏み入れる。それは本当はよくある『普通』の出来事のはずだった。だが、その少年は『普通』ではなかつた。むしろ『普通』になれなかつた。何故なら（血の繋がらない）魔神の子供にして（なりゆきで）魔王、しかも（偶然に）勇者だつたのだから。

全ては未だ世に無く

「……なんど、汚らわしい」

『それ』を見た男は顔をしかめた。

「このよつな……このよつなものが、我がディアヴール家の血を引く者とは」

冷えた部屋。

石を積んで作られた部屋を照らすのは赤い炎の松明。

男は、足元に平伏す女に視線を向けた。

その顔は赤く、怒りに満ち溢れている。

女は額を床にこすりつけかねないほど深く頭を下げていた。

「誠に申し訳ござりません!」

女は、不自然なほど青白い顔をしていた。

体調が悪いのだと考えるのは当たり前だが、男はそんな事を気にもしなかった。

そして女も、気にしないではいられない様子だった。

「当然だ。よりによつて、銀だと? 我がディアヴール家は代々金の髪と金の目、金冠の魔神様の恩寵を受けし柱の一つだぞ……。なのに銀? 銀眼だと? たとえ髪は魔神様に近い印である黄金だったとはいえ、銀は許されん」

「申し訳ござりません!」

する、と額をこすりつける音。

血が出たのではないかと疑われるような音だった。  
しかし女の声は悲痛だった。

男は台を見る。

石畳の部屋の床に、黒い色でえかがれた緻密な陣が敷かれていた。  
ちょうど北の方角に、金色の石が置かれている。

その中央には白い台。

乗せられていたのは布に包まれた赤ん坊だった。  
生後一ヶ月も無いのではないかというほどに小さく、肌も血に塗れ  
ている。

「このままでは我がディアヴール家は、ロウフエン家に魔神様の側  
に侍る権を握られたままでないか！　この売女が、悪魔の血を引  
く女が、家名に泥を塗りおつて！」

「申し訳ございません……申し訳ございません！！」

「グィネア家とはいえ許されんぞ！　恥を知れ！」

男はそう言つてから、女を罵倒する言葉を荒々しく吐き散らす。  
女は自分が、通常では考えられないような罵倒の言葉を受けても、  
『自分が悪い』という様子を崩さなかつた。

言われて当然、報いは受けるべき、という様子。

男は台に向けて手を差し出した。

「『溢れろ水、走れ光。　我是金冠の魔神、煌月の恩寵受けし血を  
引く者』」

黒い陣、その模様を構成する直線、曲線、文字から青白い水が染み  
出す。

じわりと、だが陣を乱さない水は、陣の内側にのみ薄く満ちる。

「『此処に水鏡。　それは月を映す貴き鏡。　それは異なる場への

扉』

水は青白く、発光。

黒い陣は金色の光に染まつた。

『『此処に代償を。 代償は咎の肉、咎の骨。 いざれも捧げた代償』』

布 赤ん坊が、赤ん坊の右目が光る。

男の額に汗が滲んだ。

差し出した手が震える。

『『今、扉は開いた』』

身体のありとあらゆる毛穴が開いた。

同時に鳥肌が立つ。

これは畏れだ。

今から途方も無い、通常では見る事が出来ない奇跡が始まる。

そして陣の中から湿気た濃い緑の香り。

それは何処か獣臭く。

『『対象と代償は同列。 何を欠いても、同じ。 ただ運べ、運べ

運びたまえ！』』

光は、一瞬強く輝いた。

陣の中が見えないほどの強い光。

女は目を閉じる。

光が収まるのを瞼の裏に見て、女は目を開く。

「……ふん」

滴る汗を袖で拭いながら男は息を吐く。

男の荒い息が部屋に響く。

陣は光を放つてはいない。

最初とほぼ同じ状態。

だが、陣の中に台と金色の石はあつたが、その上に乗っていた布と赤ん坊の姿は無かった。

まるで、最初からそこに居なかつたかのようだ。

## 魔神は照れない

「 素敵で、」  
「 ますわあ！」

黒いワントピースと白いエプロンを纏つた女が、歓喜の声をあげた。

そこには陰鬱さとは無縁の、真っ白な部屋だった。

鏡のように磨きあげられた床と壁。

敷かれた絨毯は赤く毛も深く、調度品は一流の手によるものに見えた。

「 坊ちやま、素敵で、」  
「 ますのつ！」

胸の前で自分の手を絡ませ、頬を赤らめる。

そんな女は小麦色の肌に鮮やかな赤い髪と藍色の瞳をしていた。

「 坊ちやまをこんなにも素敵に仕上げる事が出来て……私も本懐を遂げ、非常に嬉しく思いますわあ……それと同時に自分の腕を誇りに思います」

「 ……ただ、ちょっと髪を梳かしただけじゃないか」

皿尻に涙を浮かべしみじみと語る女に、少年は軽く頭を搔いた。少年の少し長めの銀色の髪が、瞼の上にかかる。

「 どうちにしたって、色は変えるし……」

「 それでもで、」  
「 ざいます。私は、坊ちやまの容姿に磨きをかける事が生きがいなので、」  
「 ざいます。つまり、坊ちやまがたとえ突然女になられたとしても、突然人間をお辞めになられたとしても、坊ちやまの容姿に磨きをかけますわ」

「 そうじやなくて……」

少年は自分の姿を見下ろす。

白いシャツに黒い衿、紺のズボン。

衿から通すネクタイは黒く、シャツの胸の辺りに剣と杖、そして盾を組み合わせた紋がある。

どれも新しく作つたものばかりに見えた。

少年の首には、金で作られた月のペンダントがある。月は金、だが鎖は白。

少年の髪の色に合わせたかのような白だった。

「この名札」

少年が示したのは衿に付けられた青い名札。

流暢な薄い黄色の文字で少年の名前が記されている。

「俺、確か黒が良いつて言つたはずなんだけど……」

名札の色は五色ある。

青に黄字の名札、緑に白字の名札、黒に白字の名札、白に黒字の名札、金に黒字の名札。

少年は黒に白字の名札を望んだはずだったが。

「私の独断により、青に変更しました」

「なんですか!?」

「何故なら坊ちやまは、黒より青と黄 いいえ金がよくお似合いだからで、『じやこ』ます。月の金と夜と青……」

胸を張つて女は詠つ。

「本当は金に黒字がよろしかったのですが、断られてしまいました

「そりや そつだろ…… 金五家しか使えない名札だから

「それはとても不自然な事ですわ」

「自然じゃないか?」

納得がいかないよつに女は顔をしかめる。

「坊ちやま、坊ちやまは自分の立場を本当に理解されていますの？」  
坊ちやまは金五家よりも優れたお方、もつと金を身に付けるべきお方です。もつと自分に誇りをお持ちくださいませ」「持つてゐよ、勿論、ちやんとね。でも凄いのは俺じやなへて母上で……」

「坊ちやま」

真剣な眼で女は少年を見る。

そのあまりの真剣さに、少年は息を呑む。

今までとは放つぬ気が全く違つ……。

「母上ではなへ、父上ではじやこせよ」

その発言に、やや少年は沈黙。

そして。

「……え？ もう父上？」

少年の不思議そうな発言と共に、扉が開いた。  
誰かの手によつてではなく、勝手に。

「やう、今は父上だ」

豊かな低音がそこに響く。

そこにはたのは、絶世の美貌だった。

肌は陶器のよつて白く、肩まで伸びた波打つよつた髪はまるで満月のよつた金色、目も全く同じ色に輝く。

汚れもすぐには立たちそうな真つ白な衣服はまるでローブを重ねたかのよつで床を引きずるほど裾が長い。

少女が憧れる絶世の美を持つ騎士や王子とはまた違つたとえば支配者のような気配を持つ美貌の男だった。

その美だけで十分に権威の象徴。  
誰もが跪つき許しを乞うかのよつた。

男は少年を見るとまるやかに口許を緩ませる。  
……麗しい。

「やあ……息子。少しぶりだねえ」  
腕を広げ素足のまま少年に近寄る。  
素足だが、足音は一切しない。

Hプロン姿の女は恭しく頭を下げるが、道を譲るよつて退く。

「一円がぶつ……父上」

少年はやや緊張したよつて答える。

「うん？ そつか、まだ一円か……」

男は少年のすぐ側に立つ。

少年の頭は、男の肩程度しかなかつたため男は少年を見下す。

「背が、伸びたか？」

「まだ最後に会つて一円しか経つてないのに、背が伸びるわけ、な

い」

「む、そうか。昔は一円でこれほどは伸びたものだが」

『一円なに』と手で示したのは、幾ら成長期でも有り得ない幅だつた。

「食べ過ぎで太つても、一円でやつはならないから

「……難しいな」

大袈裟に男は考える。

「しかしたつたの」「田とは……」、「俺」も無理をしたものだな。  
何故かは考えずともよく分かるが」

「じゃあ、何故？」

「それは勿論……」

男は少年の顎に指を這わせる。

吐息すら聞こえそうな位置で囁きかけた。

「この父上である【俺】が息子の晴れ姿を見られぬなど……おかしな話だらう？」

「でも母上は最初届いた時に見てるから、父上も見た事になるんじやあ……」

「我が眼で、直接見る事こそが最も意味があるだらう。違うか？」

もつと顔が近くなる。

唇が触れそうな距離だ。

溜息が出来るくらいに、美しい。

「【父】と【母】は違つ生き物だらう。ならば【父】と【母】は、

それぞれ見なればなるまいよ。それとも、我が息子は【父】は、  
嫌か？」

「そんな、父上を嫌いなはずが無いだろ！？」

「ならば父に見せよ、じつくじと髪の一筋一筋から足の爪先までを  
な

ようやく顔を離した。

だが男は、言葉通りに少年を讐めるように眺める。

「……ふむ、此処はやはり親として子に何か言つべきなのだらう。

……

わざといじりへ大袈裟に自分の顎に手を当て、口を開く。

「虚められた時は、【俺】の名を告げるがいい

自信があるように男は笑う。

その笑み。

普通の人間……でなくとも、たとえ同性でも、見惚れてしまうほど  
のもの。

「父上の名前は言つてもあんまり効果が……」

「……【俺】の名を告げても効果無いだと？」

有り得ない事を聞いたとばかりに眉が上がる。

「いや、そうじゃなくて言つても信じないよ。普通の人間は父上  
に会つた事が無いし、普通の人間は相手が凄い人間じやないかぎり  
父上を知つてゐるだなんて思わないし……」

「分からん。お前はその『凄い人間』だろつ」

「俺が金五家ならそうだつて。でも俺は普通の人間として行くか  
ら、そう思わない」

「……人間は面倒だ」

それ以上、何かを考えるのを止めたらしい。

その少し悩んだような、憂いたような表情ですら麗しいとは最早異  
常。

異常な美。

異常美とでも言つべきか。

いいや敢えて異常美「ストレンジ・ビューティ」と言つか。

なんでもいいだろう。

とにかくこの美。

少年が今から行く場所にコレを越えるようなものは、一切無い。  
無いはずだ。

ちなみに田の前のこの男に並ぶ美貌の持ち主は、今までに五人しか見た事が無い。

いずれも麗しい存在だ。

性格は別として。

「……とにかくだ」

ポンと軽くしなやかな指を少年の肩にかける。

「お前はこの【俺】の育てた息子。 お前の名前は【俺】のもの、【俺】の名前はお前のもの。 故にお前の名前を貶める輩が居ようものなら【俺】の名を出しても構わぬ、何なら呼ぶが良いぞ、お前には許そ」

言葉は何処までも傲慢。

しかしそんな口調には確かに優しさはあり、愛情もあった。  
こんな言い回ししかしないような人物なのだから仕方ない……のか  
もしれない。

「うん。 ありがとう、父さん。 俺、父さんに育てられて良かつたよ」

少年は確かにその愛情を受け取っていた。

嬉しそうにはみかみながら言う。

「何を当然の事を。 お前の親はこの《俺》だ。 金冠の魔神たるこの《俺》の」

口調とは裏腹に少し照れたらしく。

腕を組み、少年に背を向ける。

「ちゃんと連絡するよ」

「当然だ。 でなければ、そちらに行くからな」

少年に背を向けるま。

でもやはり少し躊躇しきりだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9277y/>

---

勇者は魔王で人間で？

2011年11月27日20時51分発行